様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１１３６

研究課題名（和文）帝国日本の地理的知と「満洲」ツーリズム

研究課題名（英文）Geographical knowledge of the Japanese empire and tourism to Manchuria

研究代表者
米家　泰作（Komeie, Taisaku）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：１０３１５８６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：(1)事例研究として、近代の中国東北部（いわゆる満洲）で展開した帝国日本のツーリズムについて検討した。ロシア帝国／ソ連の影響力が強く残っていた満洲北部への帝国日本のツーリズムは、初期には敵対するロシアへの旅という性格を帯びていたが、次第に帝国日本の最前線として位置づけられ、日本人旅行者に手懐けられた地域へと変貌した。
(2)理論的考察として、ツーリズムの側面から、帝国日本の心象地理の空間構造について検討した。それは、文明化／停滞、同質性／異文化、他の帝国・文明との対峙／征服という三軸から成り立っていた。この複合的な構造は、近代の海外旅行と植民地主義を捉える上で、重要な示唆を与えるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本人の海外旅行の最初の興隆は、帝国主義の時代に築かれた。かつて、台湾・朝鮮・中国東北部への旅行は、娯楽のためではなく、実業や教育上の知見を得るために、盛んに行われた。そこで旅行者たちは、自身の体験を通じて、帝国日本を文字どおり「体感」した。しかしそれは、帝国を称揚する価値観によって整えられたものであり、特定の地理的イメージ（心象地理）を構築するために機能した。このことを振り返ることは、現在の日本が周辺諸国に対してもつ理解の淵源をたどることを意味する。今日、開かれた異文化理解を模索する上で、本研究が示す近代日本の心象地理は、さまざまな課題を省みるための参照例となるだろう。

研究成果の概要（英文）：1. A Case Study. Japanese imperial tourism to modern northeast Chine, especially northern Manchuria, is examined. Initially, the area was characterized by a hostile trip to a Russian/USSR territory, then it became gradually regarded as the forefront of the Japanese empire and was transformed into an domesticated area for Japanese tourists.
2. A Theoretical discussion. The spatial structure of the imaginative geographies of the imperial Japan is examined from the viewpoint of tourism. It had a constitution with three axis: civilization/stagnation, homogeneity/heterogeneity, and confrontment/conquest. The complex structure suggests important insights in understanding Japanese oversea tourism and colonialism.

研究分野：歴史地理学

キーワード：帝国ツーリズム　「満洲国」　哈爾浜　斉斉哈爾　日露戦争　ロシア　ソ連　心象地理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代の帝国主義に関する歴史地理学の研究においては、サイードの「オリエンタリズム」と「心象地理」概念の影響が明確になった 1990 年代以降、植民地に対する宗主国側の知の構築・再生産が、重要な焦点の一つとなっている。ここで、ある地域の土地や景観・人々・文化等に関する知識を「地理的知（geographical knowledge）」と呼ぶとすれば、地理的知が宗主国や植民地の間で循環・共有されるネットワークや、植民地化する側とされる側との間で生じた地理的知の軋轢や交雑に関する議論が、盛んに展開している。しかしながら、こうした研究の対象地は大英帝国とその植民地に偏っており、日本の歴史地理学者にとっては、帝国日本に関する研究の発信が学問的な責務となっている。

上記の問題意識から、本研究の報告者（米家）は、近代日本がもっていた自帝国に関する地理的知には、朝鮮半島や台湾といった植民地に後進性を見いだし、帝国の周辺として「他者化」する一方で、同時に潜在的な日本として「自己化」するような、アンビバレントな心象地理が含まれていた、と論じたことがある（米家「「近代」概念の空間的含意をめぐって」、歴史地理学 54(1)、2012）。しかし、「満洲」（中国東北部。以下、括弧は省略）に対する旅行者の地理的知や、それを支える心象地理を分析すれば、他の植民地に対するものとは異なった特色に気づく。すなわち、満洲はロシアと植民地化を争ってきた空間であり、帝国日本の戦跡と勝利が強調される地域であった。と同時に、ロシアの遺産や移民に対しては、西洋に向けられたオクシデンタリズムが掻き立てられる傾向があった。帝国日本にとって満洲とは、「地理的知の空間構造のなかに、決して『自己化』しえない西洋をいかに組み込むのか」、という問いが突きつけられる場であったといえる。

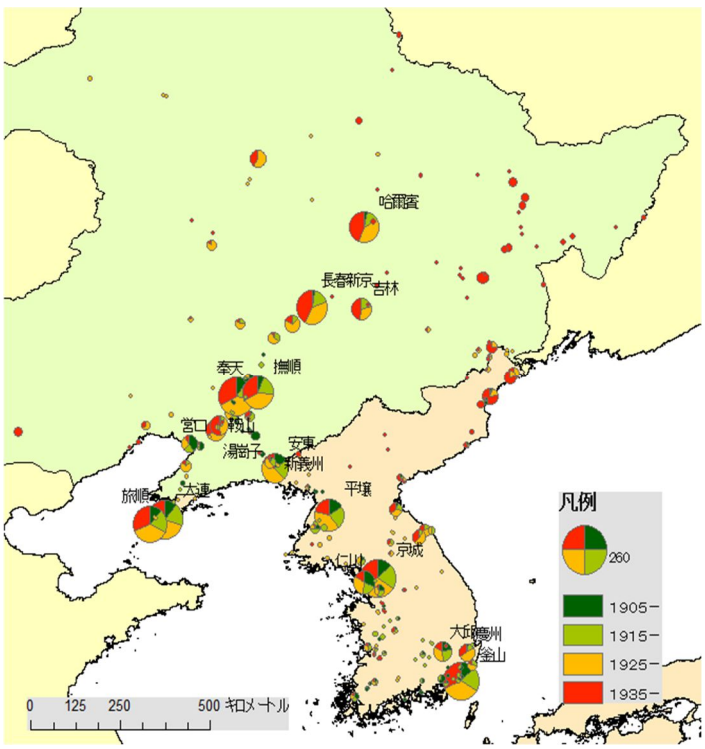
２．研究の目的

本研究の目的は、近代日本における満洲に関わる地理的知の発展を捉え、そのなかで特にロシアないし西洋的な要素に与えられた意味づけの政治性を考察することにある。その際、行政機関や植民学者が生みだした専門的な知よりも、日本人訪問者のための案内書や地誌、実業家や教員・学生たちが残した旅行記、さらに現地で日本人旅行者を迎え入れた入植日本人らによる受け入れ体制やガイドの整備に留意し、現地で展開した地理的知とそれを支えた心象地理の特徴を議論する。こうした議論を通じて、他の植民地とは異なる満洲の特色を浮き彫りにすると同時に、帝国日本における地理的知の最前線として位置づける。

近代日本の帝国主義を支えた地理的知の空間構造において、いかにして満洲のオクシデンタルな性格が強調され、旅行者に受容されたのか、そして欧米への対決的な姿勢へと結びついていったのか。これが、本研究の核心をなす学術的な「問い」である。

３．研究の方法

本研究の資料の中心となるのは、1905 年から 1945 年の間に日本人が記した満洲への旅行記（単行本としては 170 点以上。右図はその訪問地ごとの訪問点数を時期別に示したもの）や、旅行者や実業家向けに書かれた満洲の地誌・案内記類、そして現地で日本人旅行者のために用意された案内書や地図類である。



それらは、満洲全体を対象としたものから、旅順や奉天（現瀋陽）・新京（現長春）・哈爾浜（ハルピン）・斉斉哈爾（チチハル）などの主要都市に即したもの、またロシア／ソ連国境近くの小都市（牡丹江・佳木斯（ジャムス）・黒河（ヘイホー）・満洲里）に関わるものがある。

多くの旅行者は主要都市を駆け足でめぐるのみであったが、満洲南部では日露戦跡への訪問を欠かさなかった。また満洲北部から朝鮮半島北東部への鉄路が通じて以降は、哈爾浜を中心に満洲北部を

周回する者も増え、さらにソ連との国境地帯を訪問する者もみられるようになった。本研究では、上記の資料群から、旅行者が満洲の地理をどのように捉えたか、そしてそのなかでロシア的な要素がどのように位置づけられたのか、推移をたどる。

その際焦点となるのは、日露戦争以降も「満州国」成立までロシア／ソ連による運営が続いた長春以北の東清鉄道であり、満洲北部を旅する日本人は、鉄道を通じてロシア／ソ連を体験した。さらに満洲北部には哈爾浜を始め、ロシアが建設した都市や拠点があり、ロシアの遺産やロシア人移民にも接することになる。それゆえ、本研究では戦跡の多い満洲南部に留意しつつも、満洲北部に着目して分析を進める。

一方、旅行者の増加を受けて、満鉄のような鉄道業者だけでなく、当該地の日本人社会も積極的に旅行者を受け入れる傾向がみられ、そのなかでロシア的要素も、正負さまざまな評価と結びつけられて紹介されていく。都市や日本人入植地で生じたこうした動向との関わりも、本研究は分析することになる。

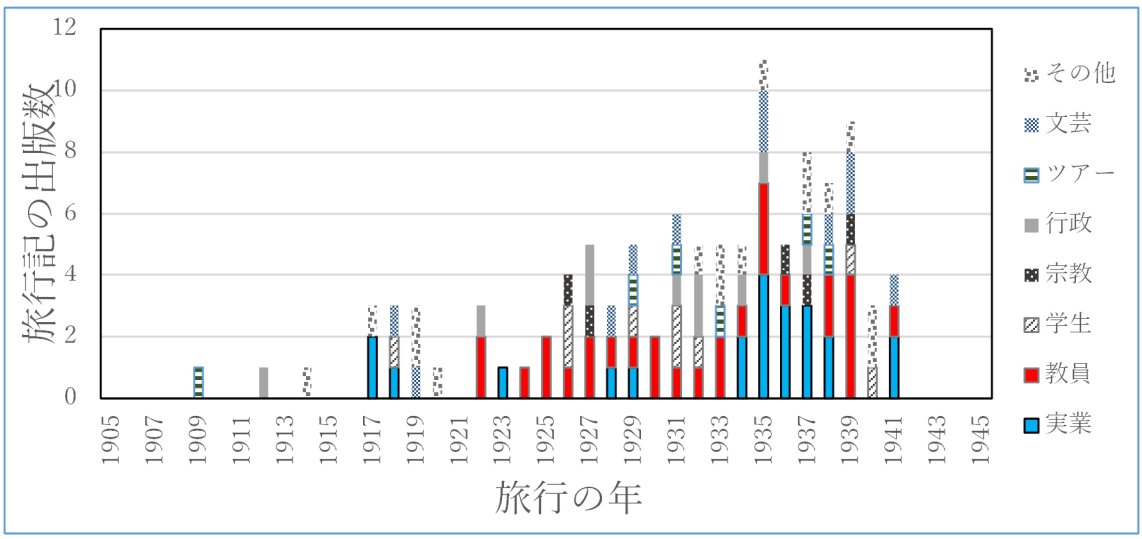
４．研究成果

本研究の成果は、哈爾浜、斉斉哈爾をはじめとする満洲北部への旅行記や案内記について、個々の場所に即して分析した事例研究と、そうした事例研究を踏まえ、地理的知の空間構造を議論した理論的考察の、二つに整理することができる。

(1) 事例研究

報告者が収集した旅行記は、1920 年代後半から日本人の満洲北部への旅行が漸増したことを示唆している（前掲図を参照）。そのなかで哈爾浜は、日露戦争直後からわずかながら旅行例があるものの、ロシア帝国の前線として位置づけられ、敵対的に、また否定的に観察されていた。こうした状況は、ロシア革命（1917 年）によるロシア本国の影響力の低下、「満洲国」の成立（1932 年）、ソ連が継承していた東清鉄道の買収（1935 年）と南満洲鉄道への経営委託を経て、変化する。すなわち、満洲北部は次第に日本人旅行者にとって「親しみやすい」空間へと様変わりし、哈爾浜だけでなく、斉斉哈爾やその他の地方都市、そして日本人移民の開拓地の視察も増加した。

哈爾浜では 1937 年に観光協会が組織化され、積極的に日本人観光客を受け入れた。次のグラフは、哈爾浜を訪問した日本人の旅行記出版点数の推移を示したものである。1930 年代後半がそのピークであり、実業家や教員がその中心であったことが窺える。そのなかで、哈爾浜に残されたロシア建築や、デパートや歓楽街が示すロシア的な「情緒」は、日本人観光客にとってはもはや敵対的なものではなくなり、帝国日本に「従順」になった文化として消費されていく。哈爾浜観光においては、日露戦争の戦跡を示すモニュメントへの訪問も重視されており、その意味で、哈爾浜が示す「西洋的」な要素は、帝国日本に「征服」された「敗者」として、そのなかに組み込まれたかにみえる。しかしながら、旅行記や案内記を詳細に吟味すれば、それは帝国日本を構成する一つの地方文化として位置づけられたというよりは、「西洋的」なものに対する敬意を伴うものであり、優越感と憧憬とが併存するアンビバレントな対象であったことにも気づかされる。



また、1930 年代には、哈爾浜を拠点として、満洲北部の各地を訪問する旅行者も散見されるようになった。その代表的な都市は、東清鉄道で哈爾浜と結ばれていた斉斉哈爾である。ただし、哈爾浜と比較すれば、斉斉哈爾はロシア的な要素に乏しく、「西洋的」なものに対する優越感／憧憬が表面化する契機は小さかった。むしろ、満洲北西部へ帝国日本の影響力を拡張していく前線として、位置づけられたといえる。この点は、ごく少数ながら、満洲北西部の満洲里や黒河、すなわち「満州国」とソ連との国境の町を訪問した日本人の旅行記からも窺うことができる。国境への旅程を組んだのは、実業家や団体旅行者というよりは、教員や学生の旅行者であり、「帝国の最前線」におけるソ連との対峙が、彼らの関心事であった。

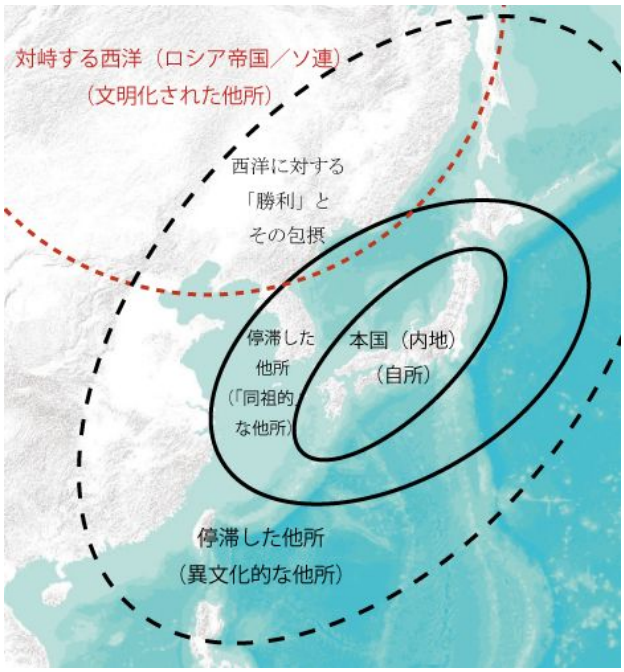
一方、満洲北東部への旅行者が漸増したことも、1930 年代後半の特徴である。これは日本人移民村を訪問し、慰問するとともに、その現況を本国に報告し、さらなる移民を促進する意図からなされた旅行である。これは、当時の満洲旅行を代表する大きな動きとはいえないものの、帝国ツーリズムのなかでは重要な意味をもっていた。そこでは、日本人移民によって「日本化」していく満洲の姿を確認することが求められていたが、同時に、ロシア移民への関心が散見されることにも注意される。日本人移民に先行して満洲各地の農村部にはロシア人が移民していたが、彼／彼女らについては、故国を失い、帝国日本に従順になった存在として言及する旅行記がみられる。そこでは「西洋的」なものへの憧憬は乏しく、ロシア人は「敗者」として描かれがちであったことに留意したい。

以上のように、北部満洲における日本人旅行者の理解や、それを支えた地理的知をみれば、ロシア帝国が残した景観や移民の存在が、重要な焦点となっていたことが明らかである。ただし、その位置づけはアンビバレントなものがあり、「敵対的な対峙」や、「従順化した敗者」を基調とする理解が形作られた反面、「西洋的」なものへの憧憬や、その積極的な消費もみられたように、幅広い評価が併存していた。日露戦争の勝利やロシア帝国の崩壊、「満洲国」の成立といった出来事が満洲の地と結びつけられつつも、ロシアが築いた哈爾浜という植民都市への肯定的な評価が、旅行者の理解に大きく影響したといえるだろう。

(2) 理論的考察

前節の成果を考察するにあたり、報告者が本研究を開始する直前に示されたマクドナルドの成果（K. McDonald, *Placing Empire*, University of California Press, 2017）は、示唆的である。McDonald は満洲のほかに、台湾と朝鮮半島を視野に入れて、「文明化 civilization」から「地方色 local color」という、帝国日本のツーリズムにおける焦点の推移を指摘している。すなわち、植民地化された人びとを観光の対象として「消費」しつつ、日本人の「境界」を維持する「多民族帝国」日本のあり方が、マクドナルドの論点となっている。この議論は重要な論点を提示するものとして評価されるが、前節で整理したように、満洲における「西洋的」な文化や移民の存在は、より対立的な前史をもつだけに、台湾や朝鮮半島と比較すれば単純に観光の対象として「消費」されたとはいいにくい面をもつ。すなわち、帝国日本にとって、宗主国（自己）と植民地（他者）の関係は、植民地ごとの差違が少なからずあり、旅行者の体験や彼／彼女らが抱いた心象地理にも影響を与えていた。満洲とロシアの存在は、その点を考える上で、欠かせない焦点となる。

一方、報告者（米家）はかつて、地理的差異と時代区分の関わりに着目し、朝鮮半島に「過去の日本」を見出そうとした近代日本の心象地理を議論したことがある（前掲「「近代」概念の空間的含意をめぐって」）。そこでは、朝鮮半島は全くの異文化としてではなく、むしろ日本と同質的ないし「同祖的」な面に言及され、すでに日本が通り過ぎた過去に属しているとみなされていた、と指摘した。歴史が動かないまま停滞しているかのような朝鮮像は、「日本史」に包摂され、そして日本の近代化を浮き彫りにする鏡として対照化され、日本による「近代化」を容易に正当化する役割を果たしたといえる。



上記のように、満洲と朝鮮半島の対照的な位置づけに留意するならば、帝国日本の心象地理は、文明化／停滞、同質性／異文化、他の帝国・文明との対峙／征服という三つの軸が組み合わされたものとして理解できる。右の図はこの観点から、心象地理の空間構造を提示したものである。ここではまず、同祖論あるいは「日本史」への包摂が焦点となりえた植民地、すなわち内地に近接した北海道・沖縄・朝鮮半島（「同祖的な他所」）と、その外側の植民地を区分した。後者は、あからさまに遅れた他所として位置づけられ（「異文化的な他所」）、台湾のように「未開」や「野蛮」が、マクドナルドのいう「地方色」として観光化されることも生じる。

さらに、満洲へのツーリズムにおいて重要な要素であった日露戦争の史蹟や、ロシアの植民都市・哈爾浜での観光のあり方からは、「西洋」を体現したロシアとの対峙が、心象地理に大きな影響を与えたと指摘できる。帝国日本の心象地理の外縁は、日本による「文明化」が及ばないフロンティアであったわけではなく、そこは別の「文明」と争うボーダーであったといえる。そのより内側には、「西洋に対する勝利とその包摂」を体現した満洲があり、そしてその外縁には、依然として「対峙する西

洋」を置くことができる。その意味で、心象地理の空間構造は単純な同心円ではなく、本国を中心として文明化の度合いで隣接地域を他所とみなすオリエンタリズム的な構図があり、その外縁を、「対峙する西洋」への憧憬をともなうオクシデンタリズムが囲繞しているような形態であったといえる。

以上のように、帝国日本の心象地理の空間構造は、単純な同心円構造ではなく、かなり複合的な構成を形作るものであったと考えられる。この指摘は、ともすれば植民地ごとに議論されていた帝国日本の地理的知や、それを支える心象地理を、より統合的に議論していくための出発点となると期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 米家泰作	４．巻 70(4)
２．論文標題 （書評）Kate McDonald “Placing Empire: Travel and the Social Imagination in Imperial Japan”	５．発行年 2018年
３．雑誌名 人文地理	６．最初と最後の頁 498-499
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/jjhg.70.04_498	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 米家泰作	４．巻 72(3)
２．論文標題 （書評）川合一郎著『近代日本の歴史地理学―２つの系譜―』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文地理	６．最初と最後の頁 326-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/jjhg.72.03_326	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 米家泰作
２．発表標題 帝国日本のツーリズムと心象地理の空間構造
３．学会等名 歴史地理学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taisaku Komeie
２．発表標題 Japanese colonial tourism to the Russian border: Defeat and admiration for a European city, Harbin
３．学会等名 17th International Conference of Historical Geographers（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関